蛭子

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蛭子

【Ｎコード】
Ｎ３３５２Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
祖父の友人から雪の夜に聞いた話だ。岐阜の山奥のある庄屋の家に雇われそこで受けた仕事は。

第一章

蛭子

これは私が祖父の知り合いから聞いたことである。遠い過去の人知れぬ山里での話である。

「こういうことは聞いたことがありますかね」

彼は私に対してまずこう言った。この時私は自分の家にいた。たまたま祖父を訪ねてきたこの人と話をしていたのである。祖父はこの時外に出ていた。他の家族も同じである。私だけが留守番をしていた。

何もすることがなかったので一人酒を飲んでいた。そこでこの人がやって来たのだ。

見れば白い髪に深い皺を持つ方であった。だが温和そうな顔で嫌な感じはしなかった。私は老人のそんな様子を見て安心できると思い家にあがってもらったのである。どのみち家の者は帰っては来ない。祖父は近くに出ただけなのでもうすぐ帰って来るだろう。その間酒でも飲みながら二人でお話でもしようと思ったのである。

「どうぞ」

私は彼に酒を勧めた。

「安い酒ですが」

「いやいや」

老人は謙遜しながらも私の酒を受けてくれた。

「すいませんねえ」

「寒いですからね」

私は笑いながら言った。

「これで温まりましょう」

「いや、これだとまだ寒いうちには入りません」

だが老人はここでこう応えてきた。

「私のいたところは。もっと寒くて」

「はあ」
「ストーブもありませんでしたしなあ」
そう言いながら側にあるストーブに目をやってきた。
「こんな便利なものもなかったです。精々火鉢がある程度で」
「またえらく昔の感じがしますね」
私は火鉢という言葉を聞いて思わずこう言ってしまった。
「何か。本当に」
「そうでしょうね」
彼は私のその言葉を聞いて少し寂しい様な顔になった。
「貴方みたいな御歳の方には」
「はい」
その通りであった。火鉢と言われてもほんの子供の頃にちらりと見た記憶がある程度である。話には聞いてはいるが実際に使ったことすらないものであった。
「けれど私等の子供の頃は普通にあったものです」
「そうだったのですか」
「それだけでもいいものでね。冬は本当に寒いものでした」
「はあ」
そう言われても残念ながら今一つピンとこなかった。
「あの人もこんなに寒かったですかな」
「あの人！？」
それは誰のことだろうかと思った。
「それは一体」
「あ、いや」
老人は自分がふと漏らしてしまった言葉に対して困惑した顔を浮かべた。
「それは」
「まあ出した話のついでです。お話しましょうか」
それではじまった話であった。偶然の為であろうか酒の為であろうか。それともこの寒さの為であろうかそこまではわからない。だ

がこの話がはじまったのは事実であった。それは私にとって決して忘れられぬ話であった。
「人にはある筈のものがない人のことを」
「ある筈のものがない」
私はそれを聞いた時まず首を傾げさせた。
「それは一体どういうことでしょうか」
「身体のことですわ」
老人は何かを見る目でこう語ってくれた。
「身体、ですか」
「私等はこうやって目とか耳がありますな」
「はい」
私は答えた。
「それはまあ」
「手や足も。けれどそれがない人も中にはおますなあ」
「はい」
私は頷いた。そうした障害を持つ人の話も当然知っている。そうした人達の施設にもお伺いしたことがある。多少は知っているつもりではある。
「これはそんな話なんですわ」
老人はそう前置きをした。やはりその目には何かを見ている。だがその何かがよくわからなかった。少なくとも私を見ているのではないことはわかった。
「もう遠い昔のことですわ」
老人は言った。
「本当に。あれからどれ位の月日が経ったのか」
「どれ位前ですか？」
流石に気になった。私は彼に尋ねた。
「そうですなあ」
彼は目を細めてまた何かを見た。ここで私は彼が何を見ているのかに気付いた。

彼は過去を見ていたのだ。遠い昔のことを。そして私に語っていたのだ。
「戦争より前のことですわ。少なくとも」
「戦争ですか」
「はい。あの長くて辛い戦争よりもまだ前でして」
第二次世界大戦よりも遥かに前の話であることはすぐにわかった。だがそれより前となると。もう私にはどれだけの過去のことなのか見当がつかなかった。
「私がね。爺様から聞いた話なんですよ」
「はい」
「子供の頃に。ですからもうあの戦争よりも前の戦争の話になりますな」
「第一次世界大戦の頃でしょうか」
「いや、もうちょっと前です」
彼は言った。
「日露戦争の頃の話ですかなあ。本当にそれ位の頃のお話です」
「はあ」
もう完全に遥かな過去の話だと思った。そこまでくると私の観点では歴史上の話である。既に第二次世界大戦ですら歴史上の話だというのに。祖父が満州に出生していたと言われてもピンとこない人間である。それでどうして日露戦争の頃が現実のものとわかるのだろう。人の世界の時間の感覚とは実際にその時代にいないとわからないものだ。
「その頃は今よりずっと寒かったです」
「はい」
「私の生まれたところはね。飛騨の田舎でして」
そのわりには訛りがないと思った。だがここは黙って話を聞いていた。
「何もないところでした。そして冬には雪ばかり積もって」
「そうらしいですね」

あの辺りは行ったことはないが冬になると深い雪に覆われるということは聞いている。日本アルプスのところだけに山も相当険しいらしい。

「そこの庄屋さんの話ですわ。まだそこに家があるのかまでは知らないですが」

「庄屋さんのですか」

「ええ。村で一番大きな家でしてね。大きな蔵を何個も持っておられました」

「蔵を」

それを聞くとかなり羽振りのいい家であったことがわかる。

「飛騨でも有名な家だったそうです。そこの家でのお話なんです」

「はい」

「御聞きしたいですか」

こう言われても今更引くわけにはいかなかった。私の好奇心がそれを許さなかった。

「はい」

私は頷いた。

「是非共教えて下さい」

「そこまで仰るというのなら」

どうも御自身から出されたお話だがやはり躊躇うものがあったらしい。一度は引っ込めようとしたのがその証であった。だが私に言われて話す決心をしてくれたのであった。だが今考えるとこれが正しいことであったかどうか疑問である。この話はそれ程深いものであったからだ。

「その蔵の一つのお話です」

「はい」

私は酒を飲む手を止めた。見れば老人もであった。それまでの温和な顔が消えていた。こうして話ははじまったのであった。

第二章

それは本当に昔の話であった。日露戦争がはじまったかはじまってもいないかの頃日本という国はまだかっての古い名残が幾つも残っていた。

いいものもあれば悪いものもある。一概には言えない。そしてその中には影の世界に属し決して表には表われない話も存在するのである。これは飛騨の奥のある村におけるそうした影の世界の話である。

この時村に一人の若者が招かれた。彼はその村の庄屋の家に使用人として雇われたのである。大きな庄屋であり金もいいと言われて喜んでこの村に来たのだ。

彼は名古屋の方の生まれだ。街でしがない工員として働いていた。毎日生きるのに精一杯の金を得る為に汗と油にまみれて働くのに嫌気がさしてきていたのだ。その時新聞でふと読んだこの庄屋の話を見てこの村にやってきたのだ。

「こんな美味い話はない」

彼はまず金を見てこう思った。何と今働いているところの給料の六倍程なのだ。そのうえ食事も住む場所も提供してくれるという。話半分にしてもこんな美味い話は乗るしかないと思ったのだ。

そして途中まではできてまだ日も浅いと言えた汽車に乗った。ゴトンゴトンと揺られて飛騨の方に進む。だがこの時はとてもそのような山奥にまで汽車は通ってはいない。すぐに汽車を降りそこからは歩いて向かった。

辛い道であった。山ばかりで細い山道を伝っていった。そうした道を何日も通り村へ向かった。どれだけ歩いたかわからないが何日か歩いてようやく何かが見えてきた。それは人里であった。

「あそこかな」

彼はそれを見てまずこう思った。深い飛騨の山奥にはああした小

さな集落が幾つもあったと言われている。事実ここに来るまでに何度もそうした集落を見てきたし立ち寄っている。だからすぐにあれだと判断することはできなくなっていたのであった。
まずは集落に入る。それから村人を見つけて声をかける。まずは村の名を聞いてみた。
「ああ、それならここですじゃ」
気のいい感じの老人がにこりと笑ってそう答えた。
「それでここに何の用ですかの」
「はい、実は」
彼はここに来た理由を老人に話した。庄屋の使用人の募集を受けてだということも全て話した。だがそれを聞いた時老人の顔に暗い影がさした。
「そうじゃったか」
彼は俯いてこう呟いた。
「あの、何か」
彼はそれを聞いてかなり不安になった。
「庄屋さんの家に何かあるのでしょうか」
「すぐにわかることですじゃ」
老人は暗い顔のまま言った。
「あの噂が本当じゃったらな」
「噂」
「あんたが運がよかったらお知りになられないことですじゃ。しかし運が悪かったら」
「運が悪かったら」
「あんた、狂ってもどうなっても後悔しなさんな」
「後悔って」
話を聞けば聞く程不安になってきた。
「何なんですか、一体」
「いや、何でもないことですじゃ」
どういうわけか急に素っ気無い様子になった。

「けれど。覚悟はしておいて下され」
そう言うと村の奥の方を指差した。
「あそこですじゃ」
「あそこ」
見れば指差した方に一際大きな家があった。他の家とは全く違い瓦に白い石垣や壁まであった。まるで小さな城である。幾つもある蔵がその家がかなり裕福であることを物語っていた。
「あそこがここの庄屋様の家ですじゃ」
「あそこなのですか」
「では行きなされ。御機嫌ような」
「御機嫌ようって」
また妙なことを言われたと思った。ここには奉公に来ただけなのにそうした今生の別れのようなことを言われるとは全く思っていなかったからだ。ましてや彼はこれからここに当分いるつもりであったのだ。余所者とはいえ仲良くしたいと思うのは当然のことであった。だがいきなりこう言われたのだ。戸惑わずにはいられなかった。
「全ては運がよかったらじゃ」
老人はまた言った。
「運がよかったらな。普通にまた会うこともできますじゃ」
「はあ」
ここまで言われるともう不安を禁じずにはいられなかった。彼は不安で心を満たしながら庄屋の屋敷の方へ進んでいった。
見れば山に囲まれているがわりかし豊かな村であった。川が多くそれはどれも堤で見事に灌漑されていた。田が広がっておりあぜ道にはあぜ豆があった。山奥とは思えない程豊かなのがよくわかった。
「こんな村で一体何があるのだろう」
彼はそう思った。あの屋敷、そして庄屋の家に何があるのか全くわからなかった。だが心の中に張り付いてしまった不安は拭い去ることができなかった。そして彼はそのまま屋敷へと進んでいった。
立派で大きな門を潜り、庭を進むと屋敷の玄関に辿り着いた。そ

こまでも結構な距離があった。やはり大きな家であった。
家に入ると中は奥が見えない程であった。何処までも大きな家であった。彼はそこに入るとまず人を呼んだ。
「御免下さい」
できるだけ大声で言った。
「どなたかおられませんか。求人を見てやって来ました」
「はい」
程無くして声が返ってきた。そして奥から一人の少女が出て来た。地味な濃い青地の着物を着ていた。その服から彼女がこの屋敷の女中であるとわかった。
「求人を見て来られたのですね」
「はい」
彼はその少女に対して頷いた。
「それでお話を御聞きしたいのですが。宜しいでしょうか」
「ええ、どうぞ」
彼女は頷いた。表情を変えるわけでもなくまるで能面の様な顔で頷いた。彼はそれを見て心の中に張り付いてあったその不安をさらに大きなものにさせた。
その少女に案内され先を進む。暗く長い廊下であった。屋敷の中とは思えない程長い。造り自体は立派なものであったがとても暗かった。そこはまるで牢のようであった。
暫く歩いてからある部屋に案内された。少女は襖を開けて彼をその中に導き入れた。
「こちらです」
「はい」
部屋の中からえも言われぬ威圧的な雰囲気が感じられた。それはまるで何も言わせぬようなそうした威圧感であった。彼はそれを感じながら部屋の中に入った。
そこには並んで一組の男女が座っていた。広いが質素で質実剛健な創りの部屋に二人は座布団を敷いて座っていた。見れば二人共絹

の立派な服を着ている。そしてそこに並んで座っていたのだ。
「はじめまして」
「うむ」
彼は一礼した。二人はそれに頷いた。
それから彼は少女が出した座布団に正座した。二人と向かい合う形となった。少女はすぐに部屋を後にし部屋には三人だけとなった。こうして話がはじまった。
この二人が夫婦、そして屋敷の主人であることはすぐにわかった。その服と威圧的な外見からすぐにそれはわかった。彼はこれからこの二人が自分の主になるのだと思った。そして村に入った時にあの老人が言ったことがさらに心の中で大きくなった。それを感じるとまた不安になった。だが今はそれを必死に抑えることにした。そしてあらためて二人に顔を向けたのであった。

第三章

「あの」
「言わずともわかっておる」
主人と思われる男が腕を組んだまま厳しい顔でこう言った。
「新聞の広告を読んだのであろう」
「はい」
彼はそれを聞いて素直に頷いた。
「お金のことですが」
「本当だ」
そう言うと横にいる自分の妻に顔を向けた。そして一言言った。
「前金を」
「はい」
妻はそれに頷くと無言で袖に手を入れた。そして札束を彼の前に差し出した。
「えっ」
「前金と言った筈だ」
主人は重厚な声でまた言った。
「聞こえぬのか」
「いえ、それは」
彼は戸惑っていた。いきなり今まで見たこともないような札束を前に差し出されて戸惑わない方が不思議というものであった。今まで慎ましやかな暮らしをしていたのでこんな札束なぞ見たこともなかったのだ。
「遠慮はいらぬ。とっておけ」
「はあ」
彼は言われるがままにそれを受け取った。そして懐の中に入れた。
「ここまでわざわざ来てくれた。それへの運賃もある」
「そうだったのですか」

「それであたらめて聞きたい」
「はい」
彼は懐にそれを入れてから顔を主人に向けた。
「もう広告は見て知っておると思うが」
「この屋敷の使用人でございますね」
「うむ」
主人はまた頷いた。
「それでじゃ」
「はい」
また不気味なものを感じていた。彼はそれに耐えながら話を聞いていた。
「まず金のことは約束する」
「はい」
「住むところもな。屋敷に一室を用意してある」
「有り難うございます」
「食事もある。身の周りのことは一切気にしなくてよい」
まるで夢の様な話である。しかしそれでも不安は大きくなっていくばかりであった。ここまでいい話だと裏があるのでは、と今更ながら思うのであった。
彼はその不安を抑えられなくなってきていた。そして問おうとした。だがその前に主人が言った。
「してその仕事だが」
「はい」
言いそびれてそのまま応えた。
「まず聞いておくがどのような仕事でもいいな」
「勿論です」
約束通りの金が貰えるのならどんな仕事でも構わないというのは確かにあった。それを見ると多少裏があっても乗ってみたいと思えた。
「本当だな」

「はい」
また応えた。だがその念の入れ様にやはり不安を感じた。
「わかった」
主はそう言うとすくっと立ち上がった。
「では来るがいい」
そして部屋を出て彼を案内した。こうして彼は再び暗く長い廊下を歩くことになった。
だが今度はそれ程長くは歩かなかった。すぐに庭に出た。そして岩場で草履を履きそのまま庭を進んだ。それから庭の端にある蔵の側にまでやって来た。見れば立派な構えの蔵が並んでいた。その立派な外観と中にあるであろうものを考えるとやはり大きな家であるのがわかる。
主はその中の一つの前にまで来た。そして懐から取り出した鍵でその蔵の扉を開けた。
「来るがいい」
「はあ」
主はまた彼に来るように言った。彼はそれに従い中に入った。主は彼が入って来たのを確かめると懐からまたを取り出した。見ればそれは燭台であった。
それに火打石で火を点ける。それからまた中に入った。蔵の中はあちこちに多くのものが置かれていた。
見たところここには家宝やそういったものはなさそうであった。古い服やそういったものばかりのようだ。単なる物置のようであった。
主はその蔵の中央に来た。そしてそこで立ち止まると屈みはじめた。何か床をガサゴソとしていた。
「！？」
彼はそれを見て不思議に思った。この蔵の下に何があるのか、と思った。そしてまた不安になってきたのであった。
「よし」

主はそう言うと立ち上がった。そして彼の方へ顔を戻してきた。
「ではまた来てくれ」
「はあ」
増々不安が募ってきた。主は下へ降りて行く。それを見る限りどうやら階段を使っているようだ。彼はその下に何があるのか怖くなってきていた。
しかし主の言葉に逆らうことはできなかった。その言葉には他の者に対して絶対に服従を強いるようなそうした威圧感があった。彼はそれに対することはできなかった。そして言われるがまま主について階段を降りたのであった。
中は上よりもさらに暗いものであった。蝋燭のか弱い火ではあまり見えない。だがその微かな灯りを使って階段を降りる。一歩一歩少しずつ進んでいく。すると下の方に何かが蠢いたように見えた。
「！？」
だがそれは闇の中に消えてしまった。それは一瞬であるが赤いように見えた。それが何なのかとてもわかりはしなかった。彼の心の不安はさらに高まった。
主が降りてからすぐに彼も降りた。その中はうす寒く、そして何もないようであった。だが蝋燭に照らされた主はその何もない中に何かを見ているようであった。
「キヨ」
彼はふと呟いた。
「キヨ。起きているかい」
彼はまた呟いた。まるで何かを呼ぶような声であった。そしてその声には奇妙なことに愛おしささえあった。それまでのまるで押さえつけるような威圧感は弱まっていた。そしてそこに愛おしさが混ざっていたのである。実に不思議な声になっていた。
「何処にいるんだい？キヨ」
「御父様」
不意に闇の中から声がした。

「私はここです」
そしてその闇の中から何かが出て来た。彼はそれを見て思わず息を呑んでしまった。
「な・・・・・・」
その娘は這って主の前にやって来た。見れば灯りに照らされこの奥の暗い部屋もうっすらとであるが見えていた。
布団があり、そして箱が数個ある。見れば箪笥もある。そこから人が暮らしている部屋であるとわかった。そう、ここは今姿を現わした娘の部屋であったのだ。
だがこの娘は彼が見てまず絶句するに足る娘であった。顔はまるで紙の様に白く人形の様に整っている。少し切れ長の目はまるで絵に描いた様な美しさであり小さな口は桜の様な色であった。長い髪は絹の様にしなやかでありその色はまるで夜の空の様に黒かった。彼が今まで見た女の中でもとりわけ美しいと言えた。そして絹の着物を身に纏っていた。まるで姫の様な美しさであった。
だが、だがこの娘は彼が言葉を失わせる様な娘であったのだ。何と自分の父の前まで這って来ているのだ。身体が異様に小さく感じられた。だが身体が小さいのではなかった。見れば顔も胴も普通であった。違ったのは他の者にはある筈のものがないのである。それはまるで蛭の様であった。
「どうかしたのですか？」
「今日は御前に話しておきたいことがあってな」
主は先程と同じ色の声で言った。
「これから御前の世話をしてくれる人だ」
「そちらの方が」
キヨと呼ばれたその少女はそれを聞くと顔を彼の方に向けた。うつ伏せになったままゆっくりを顔を上げてきた。
「新しいお世話の方ですね」
「そうだ」
主は頷いた。

「くれぐれも粗相のないようにな」
「わかりました。私がこの様な身体であるばかりに」
「それは言うな」
主は悲しそうな声で娘に対して言った。それは父親としての声であった。

第四章

「言っても詮無きことだ」
「はい」
キヨはそれを聞くとまた俯いた。そして蝋燭の影の中にその顔を沈めた。
「それよりもな。こちらの方を大事にするようにな」
「わかりました」
「そういうことじゃ。では後から飯を持って来るからな。それまでは大人しくしておれ」
「はい」
そして主は彼を連れて部屋を後にした。その時に蝋燭をキヨの側に置いていった。そして蔵を後にしたのだ。
「のう」
主は蔵から出ると彼に声をかけてきた。
「驚いたか」
「それは・・・・・・」
まだ自分の見たものが信じられなかった。今見たものが本当のことなのかすらわからない。この世にあらざるものを見てしまったように思えてならなかった。あの娘の姿が目から離れない。だがそれが本当のことだとはとても思えなかった。何か悪い夢を見ているのではないかとさえ思っていた。
だから答えようにも言葉がなかった。何と言っていいのかすらわからなかった。言葉も見つからずどうしていいかわからないでいるとまた主が言った。
「あの娘はな、産まれた時からああだったのじゃ」
「産まれた時から」
「そうじゃ。蛭子じゃった」
「蛭子」

「聞いたことはないか。手足の無い者のことじゃが」
「ちょっとそれは」
「知らぬのも無理はないか。こうしたことは表には出ぬからのう」
「はあ」
「あの娘はいないことになってはおる。役所には死産ということで届けておる」
「そうでございましたか」
「じゃが実際にはあそこにおる。これがどういうことかわかるな」
「はあ」
ここでようやくあの老人の奇妙な態度の理由がわかった。彼はあの娘のことを気付いていたのだ。そして彼にそれを密かに知らせようとしたのだ。それにようやく合点がいった。
「このことはな。村でも噂にはなっておる」
「左様ですか」
やはり主の方も気付いていた。だがそれは口には出さなかった。彼だけでなく主も村の者も。世の中には決して話されはしないこともあるということだ。
「だがな、あの娘はいないのじゃ。わかったな」
「はい」
彼はあらためて頷いた。
「じゃから御主にはあの蔵の世話を頼みたい。よいな」
「わかりました」
呆然としたままであるが頷いた。とりあえずはまだまともであった。彼は自分が狂ったのを確かめながら主に頷いたのであった。狂わないのが不思議であったし、逃げ出したくもあったが金に誘われてそれは何とか踏み止まっていた。ここで帰ってもまた名古屋でしがない工員として生きていかなければならない。それよりも山の様な金を貰って金持ちになりたかった。人間やはり金だと思っていたから何とか狂わずに済んだ。彼はこの時程自分のがめつさに感謝したことはなかった。本来ならけなされても仕様のないことだという

のにこれで何とか踏み止まっているのが滑稽ではあったが。
「毎日朝昼晩飯をやってくれ。あとは身体を拭いて服を替えてやる」
「はい」
「麻には歯を磨き夜には布団をしいてくれるようにな。そして時折髪も洗ってくれ」
「わかりました」
「道具はこちらで用意してある。その心配はしないでくれ」
全て準備は整っているというわけであった。話を聞く限り主は娘としてあの女を見ているようであった。それを知ると少し安心した。
「あれはわしの娘じゃ」
「はい」
「じゃが。不憫な娘じゃ。折角美しく育っておるのに手も足もない」
主は悲しそうに言った。
「あれは生えては来ぬ。何があってもな」
「はあ」
彼は応えた。応えはしたが何を言うべきかわからなかった。
「生まれてからずっと蔵の中におる。生まれてからじゃ」
「ずっとですか」
「うむ」
主は頷いた。
「今まであの姿を見て狂った者もおる」
これには応えなかった。だがあの老人の言ったことがよくわかった。だから法外な程の金を貰い待遇もいいのだとわかった。わかってはいてもやはり信じられないものがあった。
「それでじゃ」
主はあらためて彼に顔を向けてきた。そして問う。
「頼めるか。娘の世話を」
その目は彼を見据えていた。彼がどう言うのかを見守っている目であった。
「どうじゃ」

「折角ですし」
彼は答えた。
「御受けさせて頂いて宜しいでしょうか。ここまでわざわざ来ましたし」
「受けてくれるか」
主はそれを聞いて目に微かに喜びの光を含ませた。
「はい」
彼はまた答えた。
「私で宜しければ。何でも」
決して慈善などではなかった。あくまで金、そして待遇がよかったから受けたのであった。名古屋に帰るだけどころかそれ以上の金はもう貰っていた。逃げようと思えば逃げられた。しかしここはもっと金が欲しかった。その為ならば手足のない少女の世話なぞ何ともないとも思ってはいた。どれだけ信じられないものを見てしまったとして。狂わなければよいと自分に言い聞かせていたのである。
「わかった」
主はそこまで聞いて頷いた。
「では宜しく頼むぞ。娘の世話をな」
「はい」
こうして彼は屋敷の一室を与えられあの蔵の中の娘の世話をすることとなった。そして屋敷に泊り込んで働くこととなったのであった。
その部屋はかなりいい部屋であった。屋敷の離れにあったがそれでもかりいい部屋であった。彼はここで朝になると起こされ、そして食事を貰った。その食事も朝のものとは思えない程豪勢なものであった。
「凄い食事ですね」
彼はそれを見てまずこう言った。白米に川魚を焼いたもの、茸の味噌汁、そして漬け物であった。白い飯はこの村ではそうそう食べられない筈であった。この時代軍隊に入るのは羨望の的であったが

その理由の一つとして白い飯が好きなだけ食べられるということもあったのである。これが為に軍において脚気がはびこり、多くの死者を出してしまったという話もあるのであるが。

「いえ、うちではこれが普通ですよ」

飯を運んで来た女中の一人がこう応えた。

「普通ですか」

「はい」

彼女は当然のように言う。それを見ると真実であることがわかった。

「私共も同じものを食べていますから」

「そうなのですか」

「ええ。それが食べ終わったらお嬢様の御飯をお願いしますね」

「わかりました」

それに頷いた。そして自分の飯を食べ終わった丁度その頃にその女中がまたやって来た。そして彼に膳を手渡した。

第五章

「お願いします」
「はい」
そして彼は蔵へと向かった。蔵の前に膳を置いた後で扉を開ける。既に鍵は手渡されているのでそれで開ける。開けてから中に入り今度は地下への扉を開ける。それから膳を持ち直して中に入る。既に蝋燭は消えていた。何一つ見えない暗闇の中であった。
「お嬢様」
彼はそこで一言こう呼んだ。
「朝の食事をお持ちしました」
「はい」
それは部屋の片隅から聞こえてきた。彼はそれを受けて膳を一旦階段の端に置くと懐から蝋燭を取り出した。そしてそれを火打石で灯りを点ける。それで光を作り部屋の中を見回した。
見れば布団が敷かれていた。そこに少女はいた。既に目覚めており顔を彼の方に向けていた。そしてにこりと微笑んでいたのであった。
「もう朝なのですね」
「はい」
彼は頷いた。それから蝋燭を下に置き膳をまた手に取った。それから少女の側に行き腰を降ろした。その時に膳も置いたのであった。
「どうぞ」
「有り難うございます」
食事は彼が自ら箸や手を取り食べさせた。少女の口まで運んで食べさせるのである。彼女はそれを無抵抗に受け止め、そして食べる。まるで人形の様に表情のない顔で。
「美味しいですか」
彼はふと問うてみた。

「今日の御飯は」
「はい」
少女はこくり、と頷いた。
「とても。今日もとても美味しゅうございます」
「左様ですか」
自分が作ったわけでもないがそれでもそう言ってもらえると嬉しかった。
「それは何よりです」
「ところで」
「はい」
少女は彼に声をかけてきた。
「確か昨日ここへ来られたのですね」
「ええ」
彼は頷いた。
「こちらへは昨日来たばかりです。本当にまだ何もわからなくて」
「何もおわかりになられることはないと思います」
「といいますと」
「私はいないことになっていますから」
表情を変えずにこう言ってきた。
「貴方も使用人の一人です。表向きは」
「はあ」
「けれど。実際には何もしていないのと同じように言われるでしょう。そしてここから出ることもありません」
「ここから」
それを聞くと急に心の中を不気味さが支配した。
「はい。それが何故かはもうおわかりでしょう」
「・・・・・・・・」
「私を知ってしまったからです」
答えない彼のかわりにこう言った。
「私のことを知っているのは。御父様と御母様と兄様や姉様達、そ

して僅かな家の者だけ」
「そうだったのですか」
「家の中でも。私のことを知っているのは限られている筈です。若しかしたら噂が流れているかも知れませんが」
この暗い蔵の中にいても頭は鋭いらしい。その通りであった。少なくともあの老人は彼女のことを気付いてはいた。だがやはりいないことになっているのには変わりがなかったのだ。
「私を見てそのまま気が狂った方もおられます」
顔は変わりはしなかったが声が変わった。悲しみを帯びていた。
「そんな私ですが。宜しいでしょうか」
「はい」
彼はまた頷いた。今までは金目当てでしかなかったが今の彼女の声を聞いてそれがほんの少しだけ変わった。不意に彼女への同情心が沸き起こったのであった。
「私でよければ」
「それではお願いしますね」
「はい」
「これから何かと御迷惑をおかけしますが」
「いえいえ」
だがまだ金への想いはあった。ここでふと同情心から金が目当ての仕事へと心を戻した。
「これが仕事ですから」
「では」
朝食が終わると彼は昨日主に言われた世話をした。服を寝巻きから普通の着物に替え布団もしまった。そしておしめも替えたのであった。手も足もなくしては何もできはしない。だから彼が替えたのであった。これも仕事であった。
最後に大きめの茶碗に水だけを置いて蔵の中を後にした。この時鍵をかけ忘れぬよう主にはきつく言われている。彼はそれを忠実に守り鍵を閉めた。そして自分の部屋に戻るのであった。

これ以外には何も仕事はなかった。朝昼晩に三回食事を持って行き、そして服を替えたり布団をあげたりおろしたりするだけであった。彼は空いている多くの時間はこっそり外に出て遊びに行ったり、何をするわけでもなくぼうっと過ごしたりして時間を潰した。慣れてみれば至って楽な仕事であった。外に出るのも少し位なら黙認してもらえた。それを考えるとやはり楽な仕事であった。

キヨの世話も楽であった。確かに最初はおしめを替えたりといったことが嫌であったが慣れるとそれ程でもなかった。キヨ自身も摺れたところのない気の優しい少女であり話していて嫌な気はしなかったそして何日も何ヶ月も共にいるうちに互いに気の許せる仲になっていたのであった。

「お嬢様」

ある日の昼のことであった。彼はキヨに食事を届けた時に彼女に声をかけた。

「はい」

キヨはそれを受けて顔を彼に向けてきた。うつぶせになったままの態勢で。それを見るとまるで亀の様に見えた。

「もうここにどれ位おられるのですか」

「生まれた時からですから」

そう前置きしたうえで答えた。

「十六年か。それ程になります」

「十六年ですか」

「ええ。それが何か」

「長かったでしょう」

彼はそこまで聞いてポツリと呟いた。

「よくも辛抱されました」

「私はここ以外の世界は知らないので」

キヨは戸惑うまでもなくこう返した。

「長いも辛抱も。関係ありません」

「そうですか」

「ここで生まれて、ここで死ぬ。それが私の運命だと思っています」
寂しげな様子もなくそう語った。
「ここでいることだけが私の人生なら。それでいいです」
「外の世界には興味はありませんか」
「はい」
キヨはその質問にも応えた。
「ありません。今更出ることもできないのはわかっていますし」
「左様ですか」
「それに。手も足もなくては何もできないですよね」
「あれは」
これには答えることができなかった。その通りであったからだ。
このことに関して嘘をつくことは彼にはできるものではなかった。

第六章

「どうでしょうか」
「仰る通りです」
だがキヨに問われると答えるしかなかった。彼はもう嘘をつくことはできなかった。
「本当に。何もできないです」
「食べることも寝ることも」
キヨはそれを受けて呟いた。
「一人ではできないのですから。それでどうしろというのでしょうか」
「どうにもできないです」
また素直に答えた。
「本当に。何も」
「そうですよね」
「はい」
彼は頷いた。
「お嬢様は。ここでずっと暮らしていくしかありません」
「それは私が一番よくわかっています。本当に」
「けれど。一度でいいから外を御覧になられたいと思いませんか」
「いえ」
しかしその言葉には首を横に振った。それを願ってもいけないことは他ならぬキヨが最もよくわかっていることであった。彼女はそうした意味であまりにも分別があり過ぎた。
「願ったら。貴方に御迷惑がかかります」
「しかし」
ここまで言えばもう引き返すことはできなかった。
「私はおぶるだけですから。ほんの些細なことです」
「外が気に入れば。ここにはいたくなくなりますね」

「けれど」
「そうなったらいつも外にいたくなります。そうすれば御父様や御母様にも御迷惑が。貴方だけでなく」
「そうですか」
それを聞いて肩の力を落としてしまった。彼はもうキヨを説得することはできないのだとわかってしまった。こうなってはもう諦めるしかなかった。
「ではいいです。馬鹿なことを言ってすいません」
「いえ、いいです」
だがキヨはそんな彼を許した。
「結局。私の場所はここしかないのですから」
「はあ」
彼は申し訳なさそうに頷いた。キヨはそんな彼を見ながら言葉を続けた。
「それに」
「それに」
彼は彼女の言葉を反芻した。
「私は寂しくはないですし」
「けどここにいつも一人じゃ」
「物心ついた時から御父様も御母様も来て下さいましたから。それに今は貴方がいますし」
「またそんな」
そんな言葉を言われると恥ずかしくなった。手足がないとはいえ年頃の、しかも美しい娘に言われたのである。恥ずかしくならないのが不思議だった。
「私はただ。ここにいるだけですから」
そしてこう言い訳をした。これは言い訳であった。
「お金を貰って。それで来てるだけですよ」
「来て下さるだけで充分です」
キヨはにこりと笑ってこう返した。

「それだけで。私は寂しくはないですから」
「そうですか」
「ええ、それだけで。人が側にいるだけで」
そう語る目の色が優しいものになった。
「私は充分です。貴方がここに来て下さるだけで」
「お嬢様」
この時だったであろうか。彼の心がはじめて動いたのは。
「私なぞで宜しいのでしょうか」
「はい」
彼女はその優しい、にこりとした顔のまま頷いた。
「それで。他には何もいりません」
「有り難うございます」
有り難い言葉であった。今まで自分のことだけ、金のことだけを考えて生きてきた彼にとってははじめて聞くような言葉であった。それが何よりも心に染み入るのであった。
「これからもお願いしますね」
「はい」
彼はまた頷いた。
「こちらこそ。宜しくお願いします」
「ええ」
キヨもまた頷いた。
「本当に。ずっといて下さい」
「はい」
この時から彼は金の為ではなく純粋にキヨの為に働くことになった。それまでの義務的なものから使命的なものに変わった。彼はただキヨの為に働くようになった。
服を替える時の身体や髪を拭いたり洗ったりすることもこれまでよりずっと真剣になった。そうすれば見えるようになったのだ。キヨのさらなる美しさが。
その日の光を知らぬ身体は何処までも白かった。白い肌に対比す

るように髪は黒い。まるで夜の闇のように黒い。その対比が生み出すこの世のものとは思われぬ美しさにも心を奪われるようになった。そしてキヨも彼を慕うようになってきていた。ここに何かが生まれぬ筈もない話であった。

そしてその何かが生まれた。彼はキヨのところにいる時間がさらに長くなった。こうして月日は流れていくのであった。

ある時彼は屋敷の主に呼ばれた。そして問われた。

「キヨのことだが」

「はい」

彼は主の前に正座して座っていた。主もまた正座し、着物の中で腕を組んで彼と向かい合っていた。

「近頃妙に明るくなってきてはおらぬか」

「左様でしょうか」

「うむ。それまではそれ程口を利かなかったのだが」

主はいつものように厳しい声でこう語った。

「だが近頃は違う。よく話をするようになった」

「はい」

「これも御主のおかげじゃな。よくやってくれている」

「有り難い御言葉」

彼はそれを聞き恭しく頭を垂れた。

「お嬢様は素晴らしい方です。ただお美しいだけではありません」

「うむ」

主はそれを聞き満足そうに頷いた。

「心根も。本当によい方です」

「そうじゃのう、だからこそわしも妻もあれが可愛いのじゃ」

「はい」

「まことに。何故あのようにして生まれたのか」

「ところで御聞きしたいのですが」

「何じゃ」

主はその目を彼に向けて問うてきた。

「お嬢様がお生まれになった時ですが」
「その時がどうしたのか」
「旦那様はどう思われましたか」
「あの時か」
主はそれを聞いて遠い目をした。
「あの時はな」
「はい」
「わしもあれもそれなりに歳をとっていた。じゃからまさかまた子ができるとは思ってはいなかった」
「左様でしたか」
「じゃが生まれたのを見た時は。今見えていることが信じなれなかった」
沈痛な声でこう言った。
「何故赤子に手足がないのか。これは祟りかと真剣に思った」
この時代はまだそうした迷信が多く残っていた。だからこそこう思うのもまた当然のことであった。
「実は最初間引こうと思った」
「間引こうと」
「うむ」
主は頷いた。この当時望まぬ赤子が生まれた時にはその子を密かに殺すことがあった。口減らしであったり止むに止まれぬ事情があってのことである。遊郭においても子を堕ろすことは普通にあった。表向きは禁じられていてもどうしてもそうせざるを得ない者達もいるのである。そうしたことを専門とする医師達もいた。こういった者達のことは厠の貼り紙等に書かれていた。彼もそれは見たことがあり当然ながら知っていた。
街ではこうであった。そして村では間引きがあった。そうした望まれぬ命が消されるのはこの時代においても、いや何時でもあったのである。影の世界の話であった。
「じゃが。止めた」

「どうしてでしょうか」
「娘だからじゃ。他に理由があるか」
「いえ」
頷くしかなかった。理屈ではなかったがこれ以上にない説得力のある言葉であったからだ。
「じゃがとても外には出せなかった。それで」
「あの蔵の中へ」
「うむ」
やはり沈痛な顔で頷いた。
「不憫じゃが。そうするしかなかった」
「それで死産と届け出られたのですね」
「そうじゃ。じゃが村では噂になっておるのも知っておる」
「左様でしたか」
それを聞いてやはり、と思った。最初に村に来た時でそれはよくわかっていたことであった。あの老人の態度と言葉から容易にわかることであった。
「そして今まであそこで育ててきた。今までな」
「長い間だったのですね」
「その間。多くの者を雇ってきた。じゃが」
言葉の音色が変わった。沈痛なものから苦しい、痛そうな言葉になった。
「多くの者が。去っていってしまった」
主は苦しそうにそう述べた。
「狂ってな。無理もないことじゃ」
「はあ」
「じゃお主は違った。狂わずにいてくれた」
「いえ、それは」
たまたまだと思った。確かに最初に見た時は自分も気が狂うかと思ったしかしそうならずに済んだ。これは本当に運がよいことだと自分では思っていた。ただ、それを支えたのはやはり金の欲しさで

はあったのだが。それでもそのせいで狂わずに済んだのは自分でもよしとしたかった。

第七章

「そしてもうかなりの間いてくれておる。本当に助かっておる」
「痛み入ります」
「あれにもよくしてやっているのだな」
主の言葉がまた変わった。珍しく温かさがこもった。
「本当に。済まぬな」
「いえ」
彼は申し訳なさそうに応えた。
「それは。仕事ですから」
「仕事でもじゃ」
それでも主は言った。
「感謝しておるぞ」
「有り難うございます」
「そして。これからも頼む」
「これからも」
「そうじゃ。宜しくな」
こうして彼はさらにキヨの世話を務めることになった。金はさらにあがり食事もよいものとなった。家の主からの信頼もあがりいいことづくめであった。だが彼はもうそれには喜ばなくなっていた。
金よりも大事なものがあるからであった。他ならぬキヨのことが。もう彼はそれだけを考えるようになっていた。
「お嬢様」
仕事がない間も蔵の方ばかり見るようになっていた。寝ても覚めてもキヨのことばかりを考えるようになっていた。そしてまた時が流れた。
ここに来て何年が経っただろうか。彼もキヨも歳をとった。彼は徐々に若さから落ち着いた雰囲気を漂わせるようになってきておりキヨはその美しさにさらに磨きがかかってきていた。年月は二人をさ

らに変えていたのであった。
二人で過ごす時間も多くなっていた。時にはほぼ一日蔵の中で二人いるようになっていた。その結びつきは単に心だけのことではなくなってきていた。これは以前からであったが近頃はさらに深いものとなっていた。
「あの」
キヨはふと蔵から出ようとする彼に声をかけた。既に布団の中にいた。もう夜だからである。
「何でしょうか」
彼はそれを受けて振り向いた。そしてキヨに応えた。
「また、来て下さいますよね」
「勿論ですよ」
彼は穏やかな笑みを浮かべて応えた。
「私はお嬢様の為にここにいるのですから」
変わったといえば変わった。ここに来たのはあくまで多額の報酬の為であった。だが今ではキヨの為にここにいる。それだけ彼も変わったと言えた。
「何時までも。ここにいますよ」
「有り難うございます」
キヨはそれを聞いて頬笑みを浮かべた。
「明日も、明後日も」
彼は言った。
「お嬢様のお側にいますので。御安心下さい」
「寒い時も暑い時もですね」
「勿論です」
「ずっと。お願いしますね」
「ええ」
彼は頷いた。
「お側にいます。そして」
「暖めて下さい。また」

「はい」
そして彼はその言葉通り次の日もまた次の日もキヨのところに来た。そして世話をし、話をするのであった。そして彼女はまた彼に尋ねた。
「私のこの身体のことですが」
「御気になさらずに」
彼はそれを聞いて顔を強張らせた。そしてこう返した。
「宜しいですね」
「いえ、それでも」
それでも彼女は言わずにはおれなかった。
「この身体は。私だけのものでしょうか」
「そうとばかりも言えないでしょう」
キヨの心を穏やかにさせる為にこう述べた。
「他にも。こうした者はいると思いますよ」
ふとここである話を思い出した。とある役者の話である。何でもかっては江戸で人気の役者だったらしい。名前は忘れてしまったがふとその役者の話を思い出した。たまたま新聞で見た話だがふと脳裏に浮かんだのである。これは好都合と言えば好都合であった。
「手や足がなくなっても。生きてきた人もいますし」
「けれどその人は最初は手や足もありましたよね」
「それは」
その通りだったがそれを言ってしまうとどうにもならなかった。
「子供は親に似るといいますから。私も」
「お嬢様」
彼はその言葉を聞いて顔を険しくさせた。
「そんなことはないです」
「私に子供が生まれても」
だがキヨはその言葉に顔を暗くさせた。
「どうせ。達磨でしょうから」
「そんなことはないです」

彼は沈み込むキヨを必死に励まそうとした。
「それは絶対にないです」
「言えるのですね」
「・・・・・・・・・・」
すぐには答えられなかった。確信はなかった。ただ言っただけであったから。
「・・・・・・はい」
それでも言った。覚悟を決めてこう言葉を返した。
「お腹、気付いていますか」
「はい」
キヨがどういった状態なのか彼も数日前からわかっていた。こくり、と頷く。
「私のお腹の中には」
「お嬢様」
彼はあらためてキヨを見据えた。
「はい」
「旦那様と奥様は私が説得します」
「産めと仰るのですね」
「はい」
彼は頷いた。
「是非共。お願いできますか」
「けれど」
だがキヨはそれに戸惑いを見せた。
「手足のない女の子なぞ。所詮は」
「そんなことはありません」
だが彼は自嘲気味になる彼女にこう言って元気付けた。
「お嬢様の御子は。そんなことは決して」
「ないと仰るのですね」
「当然です」
彼は言い切った。

「ですから。是非」
「けど御父様と御母様が御許しになるか」
「それは何としても御許しになって頂きます」
いざとなればキヨとお腹の中の子を連れてここを出るつもりだった。そして人知れず暮らすつもりであった。彼はそこまで覚悟を決めていたのだ。

第八章

「ですから。是非共」
「そこまでお強く」
「当然です」
彼はもう引く気はなかった。
「だからこそ申し上げているのです」
「・・・・・・・・・」
キヨはそんな彼の顔を見詰めた。今まで見たことがない程強い表情をしていた。そんな彼の顔を見て彼女も遂に意を決したのであった。
「わかりました」
そしてこくり、と頷いた。
「それでは全て貴方にお任せします」
「はい」
「私のことも。そして」
その時彼女は自分の腹を見下ろしていた。そして言った。
「この子のことも。お願いしますね」
「わかりました」
こうして彼は主と奥方にことの次第を話すことになった。まずは二人の部屋で平伏して申し上げることになった。
「まことに申し訳なきことですが」
彼はまず頭を平伏してから二人に対して申し出た。
「キヨのことか」
「それは」
主に言われて戸惑いを覚えた。だがそんな心を何とか励まして言おうとする。しかし主はそんな彼に対してゆっくりと口を開いた。
「言いたいことはわかっておる」
「といいますと」

「キヨの腹のことであろう」
「えっ」
それを言われて思わず全身が硬直してしまった。
「それは・・・・・・」
「わからぬと思っていたか」
主は表情を変えず彼に対してこう言った。見れば奥方も主と全く同じ顔をしていた。
「少なくとも御主よりもキヨよりもずっと長く生きておる」
「はい」
「気付かぬ筈がなかろう。そんなことはとうの昔に知っておったわ」
「左様でございましたか」
こうなってはもうこちらから何も言うことはできなかった。ただ主の言葉に頷くだけであった。
(けれど)
それでも覚悟は決めていた。いざという時には、その心構えだけは持っていた。
「してどうしたいのじゃ」
「それは」
彼は答えようとする。だが主はそれより速く言う。
「産みたいのじゃろう」
「うっ」
そう言われて思わず言葉を詰まらせてしまった。
「キヨとの子を。違うか」
「それは」
「言わずともわかっておる。全て顔に書いておるわ」
主はまた言った。
「全てな。手足のない娘の子か」
「旦那様」
彼は怯みっぱなしであったがここで勇気を振り絞った。
「お嬢様とその御子のことは」

「よい」
意外にも主の言葉は優しいものであった。
「えっ」
「産むがよい。好きに致せ」
「宜しいのですか」
「良いも悪いもあれはわしの娘じゃ」
主は落ち着いた態度でこう言った。
「そして産まれてくるのはわしの孫じゃ。どうして断れよう」
「ですが」
「産まれてきた子はわしとこれの養子にする」
そう言って自身の妻に顔を向ける。奥方はそれを受けて無言で頷いた。
「例えどの様な者であっても。わしの孫じゃからな」
「まことですか」
「無礼なことを言うのう」
この言葉には不快感を示してきた。
「わしが一度でも嘘を言ったことがあるか」
「いえ」
すぐに首を横に振って否定した。言われてみればそのようなことは一度としてなかった。
「ないです」
「そうじゃろう。では信用できるな」
「はい」
あらためて頷いた。
「そのうえで言う。産むがよい」
「はい」
「ただし、これからも決してキヨを見捨てるでないぞ」
「はい」
これはもう言うまでもないことであった。そうした気持ちが微かでもあればどうしてわざわざ主にまで言おうと思うか。彼の決意は

実に強いものであった。
「そして子も育てるのじゃ。よいな」
「勿論です」
彼は力強い声で応じた。こうして彼はキヨとの関係、そして二人の子のことを許された。そして今まで通り蔵の中で世話を続けるのであった。
日が経つにつれキヨの腹は大きくなっていく。それと共に胸も張ってきた。子が大きくなってきているのはもう誰が見てもわかることであった。
「寒うなってきましたね」
「はい」
キヨは彼に厚い冬用の服を着せられながら頷いた。
「子供が産まれる頃には。冬ですかね」
「そうですね」
彼はキヨの言葉に頷いた。頷きながら服を彼女に着せた。
「冬に産まれた子は。寒さにも強いでしょうか」
「それは聞いたことがあります」
彼はそれに応えた。
「俗にですけれど」
「そうですか」
「名前は。冬にちなんだものにしますか」
「冬に」
「はい。冬に産まれるのでしたら。そして寒さに強くなるように」
「いえ」
だがキヨはそれには首を横に振った。
「お嫌ですか」
「名前は。別のにして下さい」
「どの様なものに」
「私みたいに日を見ることのないようなことがないように。明るい名前を」

「明るい名前を」
「はい。お願いできますか」
「わかりました」
彼はそれを受けてこくり、と頷いた。
「それではそれも考えておきます」
「何が宜しいでしょうね」
「これから何があっても生きられる名前がいいですね」
彼はふとそう思った。
「何があっても」
「世の中ってやつは難儀なものでして」
少し苦笑いを浮かべた。
「何時どうなるかわかりませんから。いいことも悪いこともひっくるめてね」
「そういうものなのですか」
これは外の世界を一切知らないキヨにはわからないことであった。だが彼の言いたいことは朧ながらもわかることができた。
「ええ。ですからそれも踏まえて考えておきます」
「宜しくお願いしますね」
「わかりました」
そんな話からすぐのことであった。もう腹がかなり大きくなっていたキヨは遂に産気付いた。それを受けて家ではこっそりとだが産む用意が為された。

第九章

「産婆は」
「心配することはない」
主は慌てかけていた彼に対して言った。
「家に一人おるからな」
「そうだったのですか」
「使用人も兼ねて雇っておる。それの心配はするな」
「わかりました」
こうした時大きな家は非常に助かると思った。若しかすると主の家では家の者が子を産むことを考えて常に雇っているのではないかと思った。しかし今はそんなことを考えている時ではなかった。
産婆が来た。見れば彼もよく会うこの家の婆やであった。屋敷では最も古い使用人であるという。
「そうですか、いよいよ」
婆やは話を聞いて小さな声でこう言った。
「あのお嬢様が」
「よいか」
主はそんな彼女に問うた。
「今回も。頼むぞ」
「お任せ下さい」
彼女はそれに応えて頷いた。
「それでは早速」
「うむ」
彼の他には主と奥方、そしてこの婆やが蔵に向かった。四人は一言も話さず蔵へと向かう。外は真夜中で星一つない漆黒の夜であった。
雲も少なかった。その黒い夜には月だけが浮かんでいた。やけに大きな月であった。その日は三日月であった。

ただ大きいだけではなかった。その月は何時にも増して異様な月であった。
「あの時と同じか」
主はその月を見上げてこう呟いた。
「嫌なものじゃ」
「あの時といいますと」
彼はその言葉がふと気になって主に尋ねた。
「知りたいか」
主はそんな彼にこう声を返してきた。
「言わずともわかると思うが」
この言葉だけで充分であった。その日に何が起こったのか彼もよくわかった。それ以上は聞こうともしなかった。全てがよくわかった。
赤い月であった。不気味なまでに赤い月だった。それはまるで月に血が滲み込んだ様な色であった。彼はその月をもう一度見上げて何が起こったのかあらためてわかった。
（そうだったのか）
彼は月を見上げながら心の中で呟いた。
（こんな時だったのか）
何も言わずとも全てを物語る月であった。彼はそれを見ながら蔵の中へと進んだ。そしてキヨのもとへと向かった。
「来て下さいましたのね」
「はい」
キヨはまず彼に声をかけた。布団に寝かされている。だが何故かいつもとは違っていた。
「これは」
「どうかしたのか」
主は声をあげた婆やに顔を向けて問うた。
「いえ、お嬢様ですが」
彼女はその問いに戸惑いながらも答えた。

「御身体が。かなりお疲れのようですが」
「むう」
見ればその通りであった。キヨの身体はやつれていた。赤子に吸い取られてしまったようであった。
「大丈夫か」
「正直に申し上げまして危ないです」
婆やは言った。
「赤子様も。どうなるか」
「むう」
「いえ、構いません」
だがそのキヨが言った。
「産めるのなら。構わないです」
「いいのね。キヨ」
奥方も彼女に尋ねた。
「貴女がどうなっても」
「はい」
「そして。これは言いにくいのだけれど」
「それはないです」
何が言いたいのかはよくわかっていた。だがキヨはそんな母親に対してにこりと笑ってこう返した。
「それは。絶対に」
「そう言えるのね」
「はい。命を大事にする明るい名前が相応しい子が生まれます」
「そうなの」
「それは私が考えることになっています」
ここで彼がこう言ってきた。
「貴方が」
「はい。男の子の時の名前も女の子の時の名前も。もう考えています」
「そうだったの」

「ですからそれは御心配なく。その名前に相応しい子が生まれますから」
「だったら安心していいわね」
「はい」
彼は頷いた。これは迷信と言えば迷信だが奥方はその言葉に賭ける気になった。名前がその者を作る、古い信仰が奥方の心の中にもあったからだ。
「では宜しいのですね」
婆やはまた尋ねた。
「お嬢様はこう仰っています。後は旦那様と奥様ですが」
「わしはいい」
主はよしと言った。
「これが産みたいというのならな。後のことは全て任せよ」
「御父様」
キヨはその言葉を聞いて目をうるまさせた。
「よいな」
「はい」
「わかりました。では奥様は」
婆やはそれを聞いた後で今度は奥方に顔を向けてきた。
「如何でしょうか」
「私もいいです」
奥方も納得してくれた。
「名前が赤子を守ってくれますから。そうですね」
「はい」
彼は奥方の問いに対して頷いてみせた。
「必ずや」
「わかりました。それでは」
それで全てであった。婆やは頷いて産婆に取り掛かった。桶と湯まで持って来られそれから全てははじまった。長い時間が経った。だがそれは若しかすると一瞬のことであるかも知れなかった。

彼は待った。キヨが産む間待つしかできなかった。できることと言えば彼女の顔をみてじっと見守ることだけであった。

「お嬢様」

「大丈夫です」

キヨはにこりと笑って彼にこう応えた。

「きっと。産みますから」

「はい」

この時彼女は産むことだけを考えていた。自分のことはどうでもよかった。命を捨ててでも赤子を産むつもりだったのだ。それは彼にもよくわかった。だがもう何も言うことはできなかった。しかし彼女を見守ることだけでもしようとそこにいた。それが彼女の為だとわかっていたからであった。

また時間が流れた。長い長い時間であった。暗い蔵の中で時間だけが過ぎていく。動いているのは婆やだけであった。

「もうすぐです」

彼女は言った。

「今頭が出てきました」

ようやくであった。婆や以外の三人は思わず息を飲んだ。

第十章

だがそれからが問題であった。果たして無事産まれるか、そして。
そこから先はもう言うまでもないことであった。
それからまた時間が経った。頭から顔が出た。そして。
「腕は」
「腕は・・・・・・どうじゃ」
主は不安を必死に押し殺しながら婆やに問うた。
「どうなのじゃ」
「あります」
婆やは一言で答えた。
「ちゃんと。それも両方」
「まことじゃな」
「はい」
頷いたその顔に嘘はなかった。
「本当のことです」
「そうか」
主はそれを聞いて大きく安堵の息を吐き出した。
「それはよいことじゃ」
「けれどまだ」
しかし奥方はまだ安心してはいなかった。
「安心はできませんよ」
「そうじゃな」
主はそれを聞いて沈痛な声に戻った。
「まだ足が」
「うむ」
それはこれからわかることであった。しかし両手があったという
ことはそれだけでかなり安心できるものであったのは事実であった。
主と奥方はそれに内心大いに喜んでいた。

彼はその間もじっとキヨを見詰めていた。キヨは彼に顔を向けたままお産を続ける。辛く、苦しそうな顔であったがそれでも嬉しそうな顔であった。
「手が・・・・・・あったのですね」
「はい」
彼は頷いた。
「それも両方」
「ええ。ちゃんとあります」
「手のない私が手のある子供を産めた」
それがどれだけ嬉しいことか。キヨ自身が最もよく知っていることであった。
「もうそれだけで」
「いえ、まだです」
しかし彼はこう言って彼女を落ち着かせると共に励ました。
「あとは足が」
「足ですか」
「大丈夫です。きっとありますから」
「そうでしょうか」
「そうです」
彼は優しげな笑みを浮かべてこう言葉を送った。
「ですから。御安心下さい」
「わかりました」
こうしてお産は続けられた。胴が完全に出た。そして遂に問題の部分にかかってきた。
「そろそろじゃが」
主は息を飲んだ後でこう呟いた。
「どうじゃ」
「お待ち下さい」
婆やはそう返した。
「もうすぐわかりますから」

「じゃが」
「旦那様」
焦ろうとするところで奥方が声をかけた。
「ここは」
「そうじゃったな。済まん」
「はい」
主はその一言で落ち着きを取り戻した。そして再び黙って腕を組んだまま娘が子を産むのを見守り続けた。
それは彼も同じである。じっとキヨを見詰めたままであった。そして遂に婆やが言った。
「お喜び下さい」
「無事じゃったのか」
それを聞いた主の最初の言葉であった。
「あったのじゃな」
「はい」
婆やは明るい声でこう返した。
「ちゃんと。両方ございます」
「指はどうなのじゃ」
「十本あります。腕と同じです」
「そうか。まことじゃな」
「はい。宜しければ御覧になって下さいませ」
そう言って赤子を産湯で洗った後で抱えて主に見せた。
「この通りでございます」
「おお」
それを見た主の顔が喜びに包まれた。今まで厳しい顔を崩さなかった主が見せるはじめての笑顔であった。
「まことじゃ。まことに手も足もあるわ」
彼は我がことのように喜んでいた。
「本当のことじゃな」
「はい」

「手も足もあるのじゃ。キヨよ、でかした」
「有り難うございます」
キヨは疲れきったものでこそあるが微笑みを浮かべて父に応えた。
「私が・・・・・・ちゃんと赤子を産むことができたのですね」
「その通りじゃ」
主はまた言った。
「無事な。おなごじゃったぞ」
「おなごですか」
「御前にそっくりの顔の娘じゃ。ようやった」
「はい」
「無事産まれた。後はわし等に任せるがいい」
「はい。お願いします」
この身体では子を育てることはできない。それはわかっていた。だから彼女は両親に自分の子供を任せることにしたのである。そして彼にも。
「お願いしますね」
「お任せ下さい」
彼は優しげな笑みのまま応えた。
「無事。育てますから」
「お願いします。そして」
彼女はまた問うた。
「名は。何にしましょうか」
「あかねというのはどうでしょうか」
「あかね」
「はい。日の光を見て育つ娘ですから」
彼は言った。
「そして明るく育つように。どうでしょうか」
「いい名ですね」
キヨはその名を聞いて微笑みを浮かべた。
「とても。それを聞いていると私まで明るくなってきました」

「左様ですか」
「ではあかねのこと。宜しく頼みましたよ」
「はい」
「私達の娘を」
「私達の娘を」
こうして今一人の娘が産まれたのであった。手足のない日の光を知らぬ蛭子が産んだ娘は日の下に育つ娘であった。これは本当にあった話であった。

第十一章

「というわけなのです」
老人は話を終え、酒を一杯飲んでからこう言った。
「もう遠い昔のことですが」
「そんなことがあったのですか」
僕は肴の豆腐を食べながらそれに応えた。
「思うと。不思議な話ですね」
「そうでしょうか」
「ええ。今では当然のことですから」
母親に何か欠けているものがあろうとも生まれてくる子はそうではない。これは私にとっては当然のことのように思われた。
「ですが昔は違うのですよ」
「やはり」
「今で言うとね。迷信かもしれないですが」
「昔は本当に心配されていたのですね」
「その通りです」
老人は私の言葉に答えると自身も豆腐を口に入れた。私はそこで酒を彼の杯に注いだ。彼はそれを手にしてまた飲んだ。
「当時はそれが常識でしたから」
「そうだったのですか」
「それは言っても仕方のないことです」
「はい」
私はそれに頷いてまた酒を飲んだ。それから話に戻った。
「それよりもね」
老人は酒を一口含んでから言った。
「いい話だと思いませんか？その人は全てを賭けて子供を産んだんですよ」
「ええ」

それは確かにそう思った。信じられない程のものであったが。
「自分にはないものがきっとあると信じて。そして産んだのですよ」
「そしてキヨさんはどうなりました？」
私は尋ねた。
「お話ではお産の時はもうかなり危うい様子ですが」
「残念なことですが」
そう言って寂しい笑みを浮かべてきた。それだけでわかった。
「おわかりでしょう」
「はい」
そして私もそれに頷いた。本当によくわかった。
「すぐにね。その子を産んで」
「左様ですか」
「けれど満足そうな顔だったそうですよ。全てをやり遂げたような」
「そうでしょうね」
「最後は御主人と御両親に見守られて。今は天国におられるでしょうね」
「それは何よりです」
それを聞いてからまた問うた。
「そしてですね」
「はい」
老人は私の言葉にまた目を向けてくれた。
「その娘さんはどう為されました」
「娘さんですか」
「はい。あかねと名付けられて。それからは」
「さて」
だが彼はそれにはまずとぼけてきた。
「どうなったのか。ただ一つわかっていることがあります」
「それは」
「私の妻ですけれどね」
「はい」

「名前があかねっていうんですよ。飛騨の生まれだそうです」
「それでは」
「何、只の偶然でしょう」
しかし老人はこう言ってはぐらかした。
「只のね」
「左様ですか」
「けれど。本当に生まれてよかったですよ」
老人はまた言った。
「その娘さんも。キヨさんも」
「はい」
「例え手足がなくとも。人間なのですから」
これはいささかヒューマニズムめいた言葉だと思った。普通なら宗教家が言っても偽善に聞こえるようなものだ。だがこの時は違っていた。ひねくれ者の私ですら頷かせるものがあった。
「そして子を産んだ。全てを捨てて」
「命すらも」
「その結果として。幸福になれた人がいました。不思議なものですね」
「ええ」
「人間。何がどうなるかわかりません。本当に何事も」
その言葉を最後に私達はまた酒を飲みはじめた。外はもう雪となっていた。その雪を見ながら祖父が帰るまで静かに飲むのであった。

蛭子　　完

２００５・１２・５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3352f/

蛭子

2010年10月8日15時04分発行